

女操
教訓

女大學操鑑

全

五常字解
 昏礼式圖說
 士農工商圖
 鳴皇之圖
 書物之圖
 雌雄辨
 禮射之圖
 長柄之圖
 和氣香芬圖
 射之圖



仁

仁とは人の心
又人ともよませるの
心なり
又人の心と云ふは
人の心と云ふは
人の心と云ふは

禮

禮とは人の心
又人ともよませるの
心なり
又人の心と云ふは
人の心と云ふは
人の心と云ふは

義

義とは人の心
又人ともよませるの
心なり
又人の心と云ふは
人の心と云ふは
人の心と云ふは

智

智とは人の心
又人ともよませるの
心なり
又人の心と云ふは
人の心と云ふは
人の心と云ふは

信

信とは人の心
又人ともよませるの
心なり
又人の心と云ふは
人の心と云ふは
人の心と云ふは





〇縫^{ぬい}もの^{もの}の^{あやう}い^い女子^こが^い一の^{いち}の^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 手^てお^おひ^ひと^と同^{どう}じ^じく^くの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 お^おも^もべ^べー^ー理^りの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 あ^あら^らひ^ひて^ては^はあ^あら^らひ^ひの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 て^てき^きぬ^ぬ者^{もの}ら^らり^りた^たと^と
 家^{いえ}家^{いえ}人^{ひと}お^お不^ふく^くつ^つの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 女^{おんな}を^をお^おく^くら^らり^りと^とも^も秋^{あき}ま^まの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 百^{ひゃく}仕^し女^{おんな}も^もの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 百^{ひゃく}仕^し女^{おんな}も^もの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては

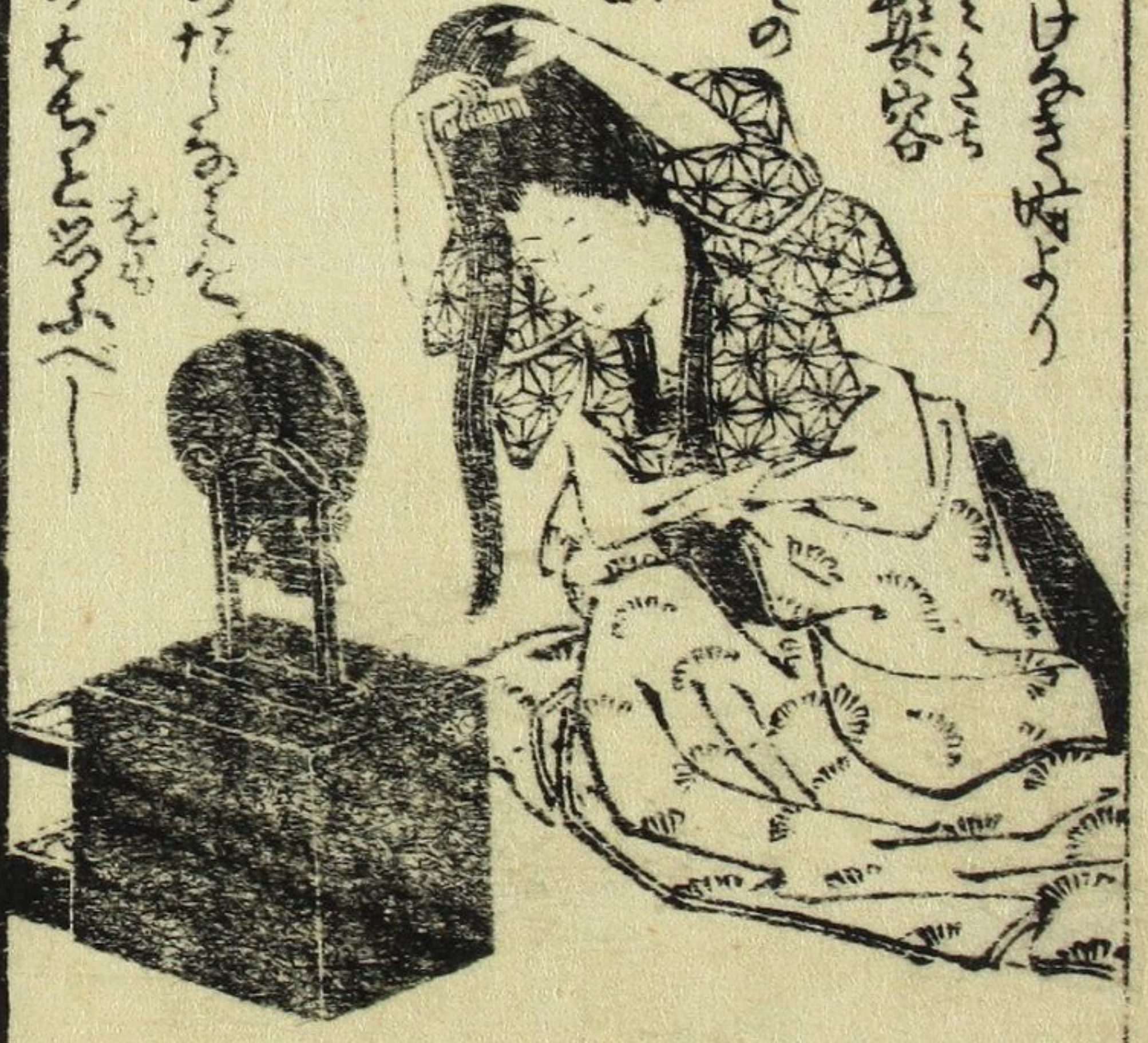


〇何^{なに}も^もす^すま^まい^い女^{おんな}の^のす^すま^まい^いの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 秋^{あき}ま^まの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 ま^まけ^けり^り又^{また}き^きぬ^ぬの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 用^{もち}ひ^ひ衣^い服^{ふく}を^を清^{きよ}ま^ます^す
 ら^らふ^ふ垢^{あせ}つ^つぬ^ぬこ^こそ
 女^{おんな}の^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 さ^され^れぬ^ぬも^もの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては
 と^とそ^そら^らり^りぬ^ぬも^もの^の縫^{ぬい}もの^{もの}を^を縫^{ぬい}て^ては



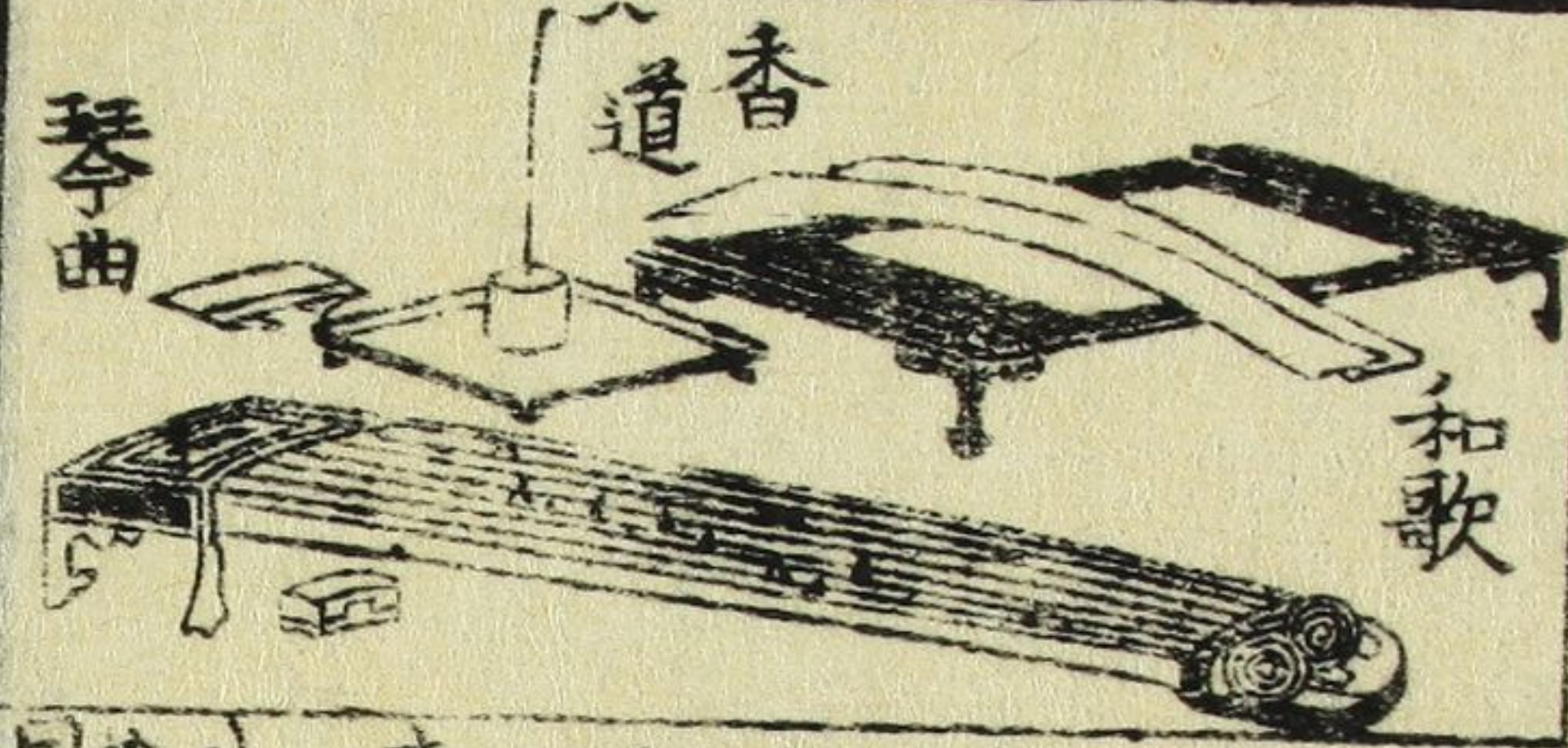
たうね

〇髪をよぶふとくさくさしたる
 よく結ぶふべし髪容
 とてみめよき女もかこの
 乱れそらふらふ其
 刃さうしきおん
 さればとて人よ
 結せるぶとさる女のか
 髪ふのなれば女のたも
 髪ふのなれば女のたも



〇書をよむのよき事
 髪をひすもむせんくの
 女のたもあつたもの
 食物の考
 梅かきんもあつた
 女のたもあつたもの
 たまればさうともよ
 よし〜らぬともあつた





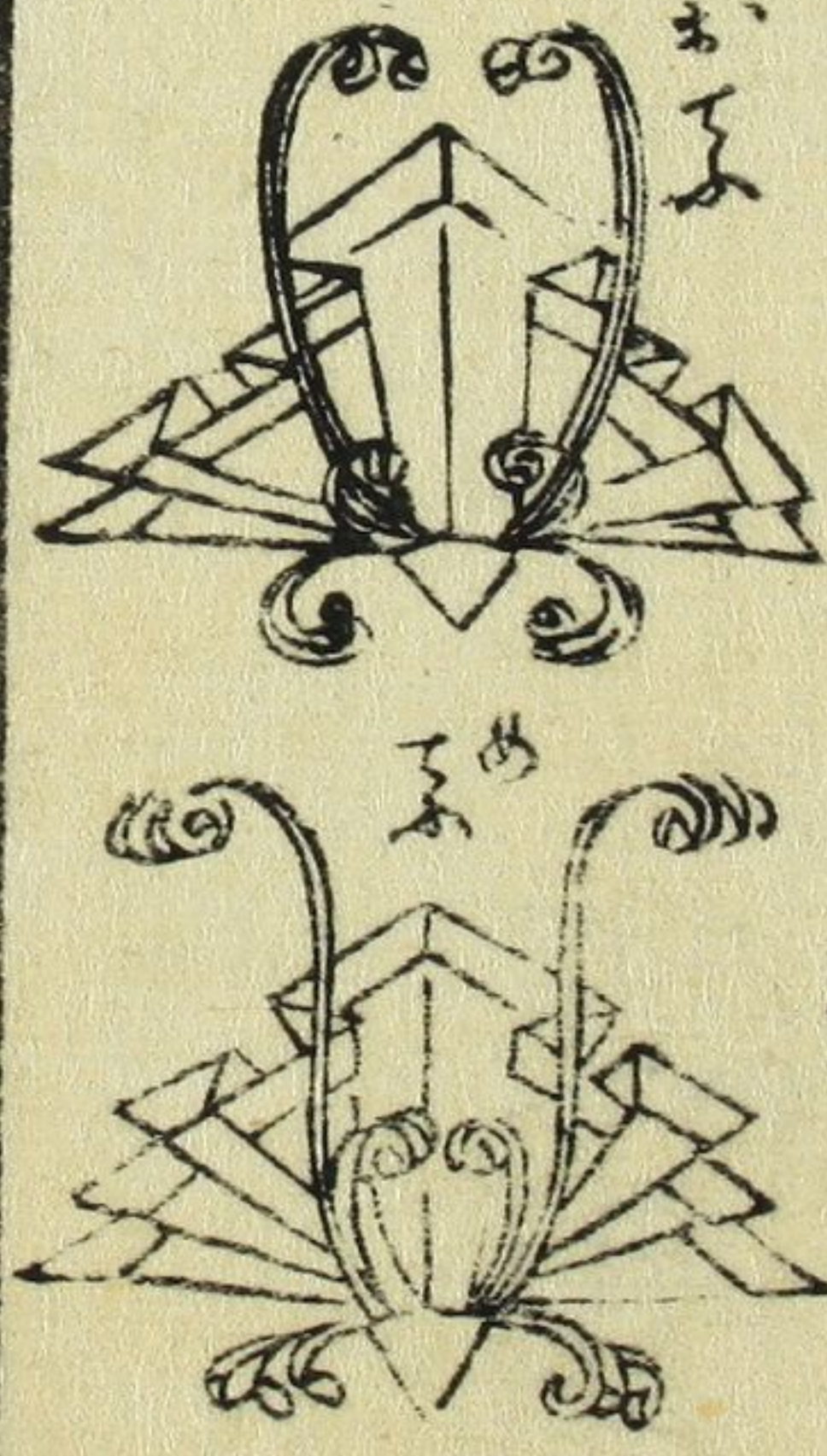
移る女は伺つる人の物のまはらふ
おとこ
 又茶を煮めき
ちややもの
 たること武の時のさかり伺は女役やの
おんなやく
 結いきちのふりまどいおるふべのらび
こま
 堅く情むぐ一琴ひき飲の香まき
いふく
 なが女のまてやさ一たが衣服も化粧
けいずみ
 も取りもちまき一て結しうへ
むす
 月立るをまゆ一とらぬへ

〇皆礼式さうへ
それ
 夫えれのの式ハ
いろく
 いろくと法はる
と
 直なれども上つ
そのい
 かてよて其家の
ゆ
 例又の国のる
どく
 どく有て一がい
よ
 よの定めがし

嶋臺之園



下くとも其家へ仕きつる吉例は、
 分限さうおつと執事を分り身なるおと法
 を正し、梅養を好む入奉者のいりなれば、冥の道具
 亦も有るまきく用ひ、あらねども長柄のとり有
 合せんとて、敵人の
 形容の拙さの不
 都合なりよ
 兵あるべし



夫婦の悪人を結ぶ、家さういふなれば、いふまゝに
 容をのこ見合は、うらば夫さうおつのお作を、
 べし故、さういふまゝに、
 なるは、ありの、妹の、
 仲人の言の、
 定規おし、
 その言の、



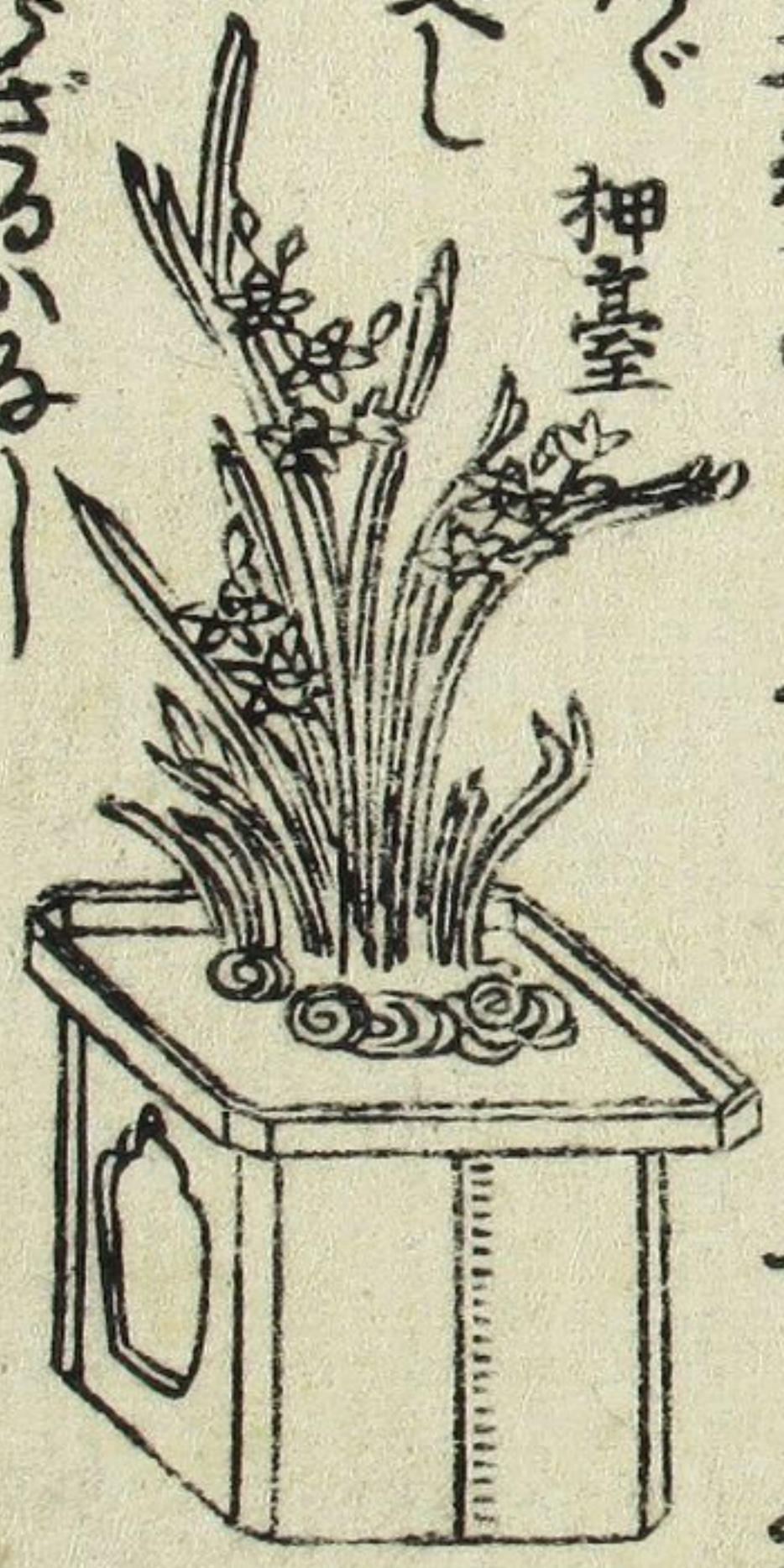
まねの或のせ持病その外何のよらにせも色
 まねの或のせ持病その外何のよらにせも色
 まねの或のせ持病その外何のよらにせも色
 長久のさしものうて未くさし方のよう
 あり又のりつを

もつと取たまふ
 時ハ目々相
 遠をとりく
 家内の不和合



富貴臺

やせむをさしものうて未くさし方のよう
 欲よかろふにたぐ 押臺
 孝婦をあらべし
 孝女の婦さま
 貞操の正かふるはる



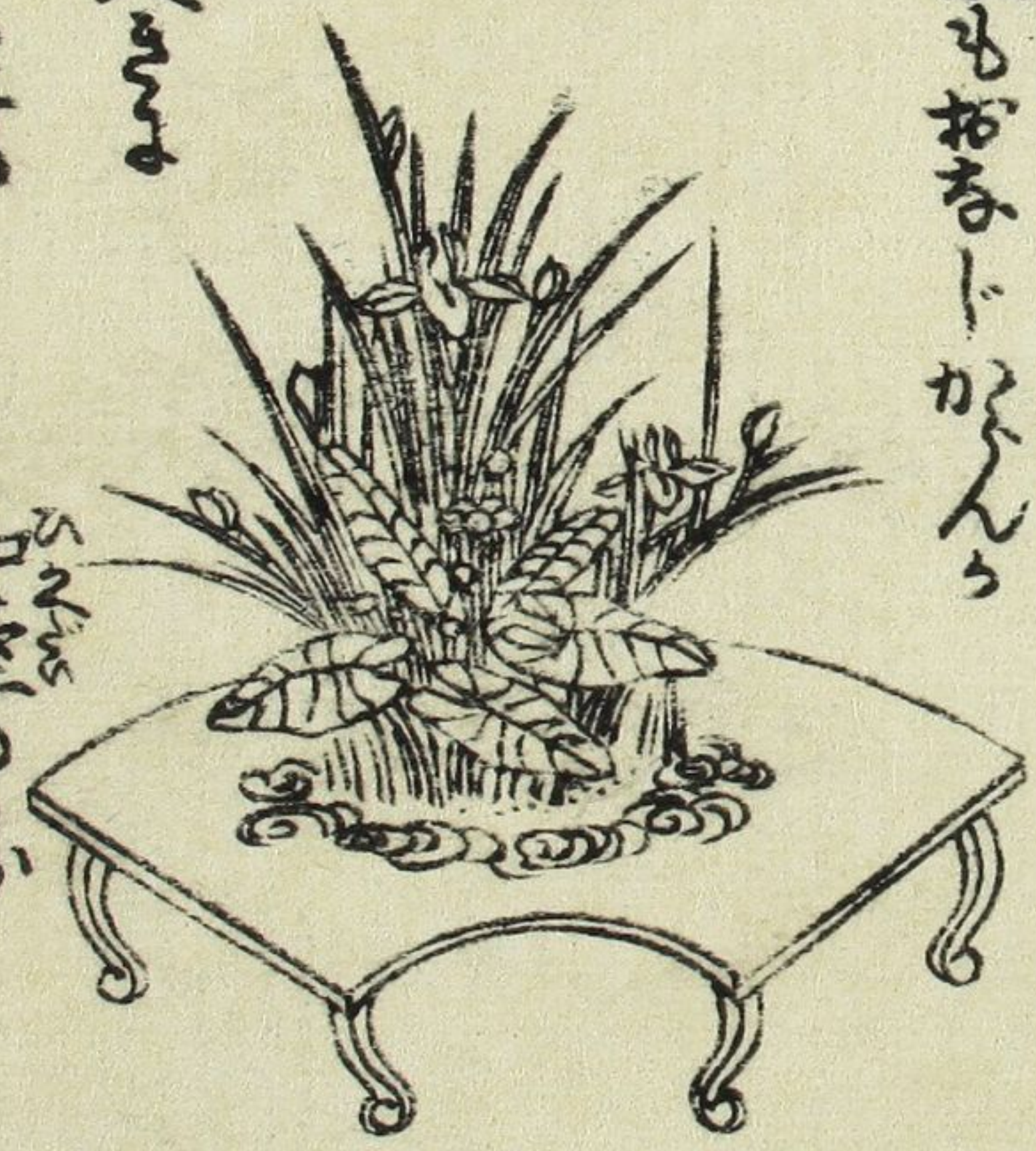
貞操の正

されば日をえんぶむらうりふらふら
 へきうたえハ天赦日
 ちりとも人の物を
 ぬすむるはそよぼ
 まれ一人今日ハ
 天赦日なりとて
 免しおんかきや
 又不成就をりても



奈良臺の景

人の意をきくは其人の心なり
 志れば男女の相性もおまにかんら
 大吉の相性も
 縁をくも其
 女おつとま不貞
 節なれば其家
 子孫とんがらむらうりふらふら
 何ん相性なりとも

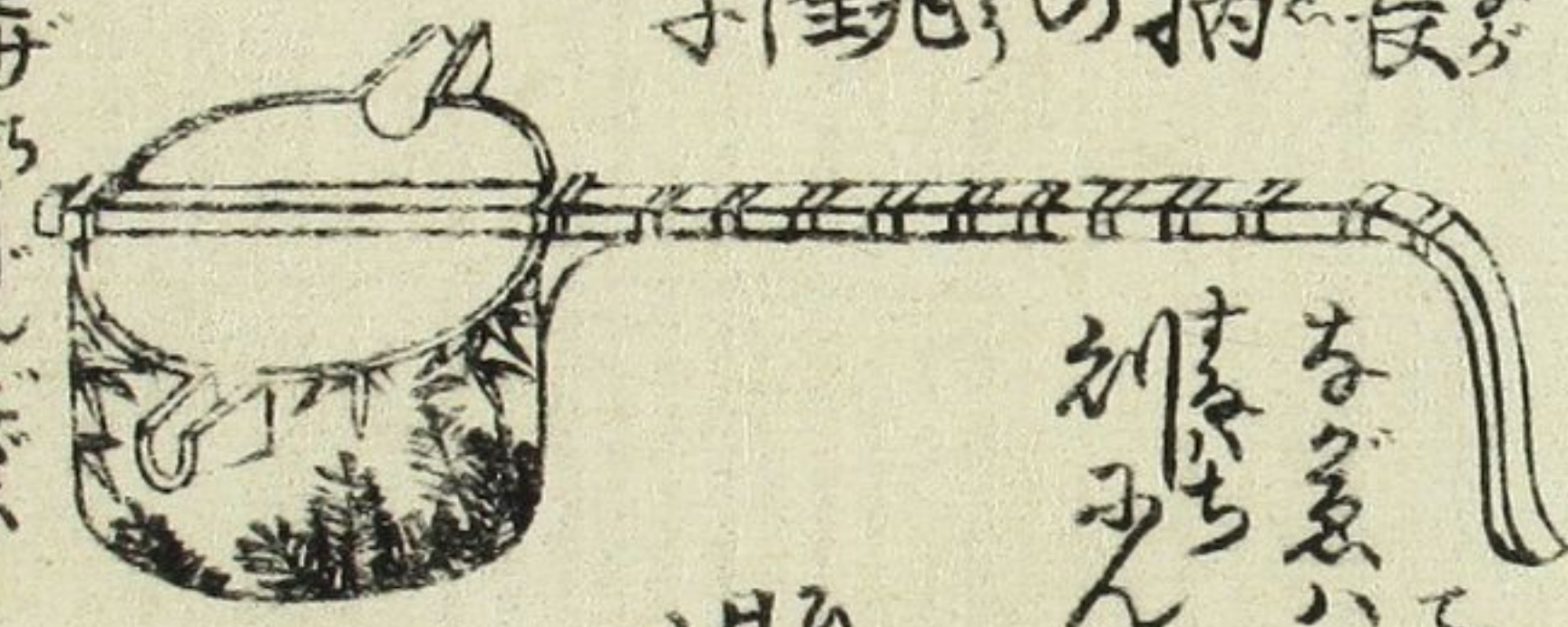


知臺の景

女の心は平しく親妻を大切よせ何ぞあまじと
 おろんやされば擗くも尚えらむべきあらや
 〇婿姻結納のといたがひは嫁をもつ婿姻の
 ことを定め知耳の方よりひりれをつることを
 半陸おひの祝義とり俗は言入とも又軒の
 印ともいふ五節五種何るひい三節三種一節一
 たり五節五種といふ斗指十者五種とさるあん
 ぶすめ婿姻へはひい舞ふ一節又小袖のこい

一まき子二かきねと
 いへどもはる友もの
 えても巻つむこふ
 袖ひとかさねの肉
 一はう春とる白
 かのり一はおもて紅
 おくくうらハちに
 色とも見合せ

長柄の鉚子



提

ながい天神七代を勸念中
 提 提
 提 提
 えねの用とく

提ハ地神五代をえん念中はえ

たろべー何れもびんづつ極ものびんづつ

杉系びんづつ二まびんづつ中を水

引結びんづつ一具はあり

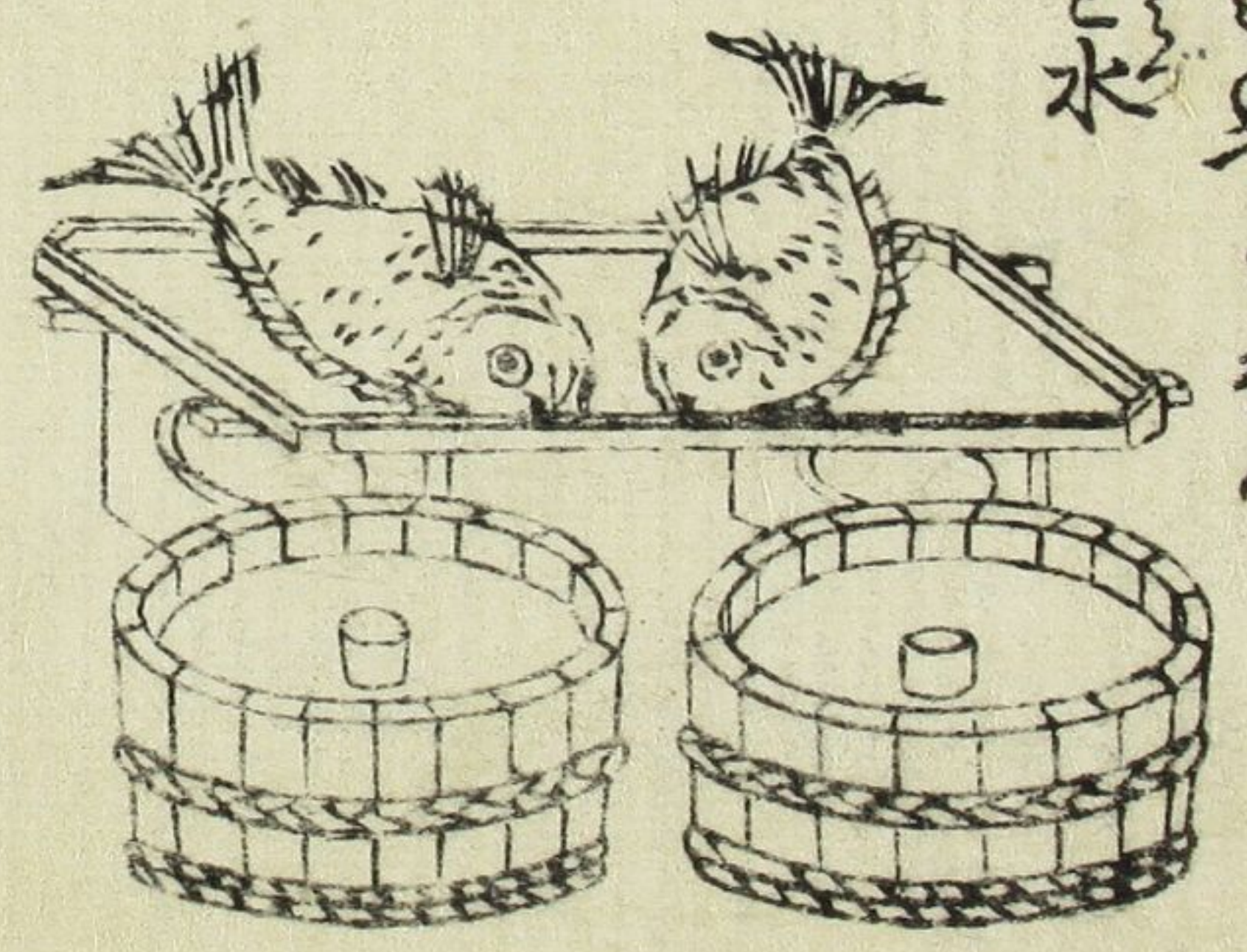
下よびんづつ一尚あり

よも畷式はありなり

葦一もどハハあり

二脚もあるハあり

右ハ町方通用の式なり



○婿姻の夜はめよりさうらぎをえりげ舞よさ

これびんづつ一よりの故実なり

をいろくとけとつぎ

説何れども古代より

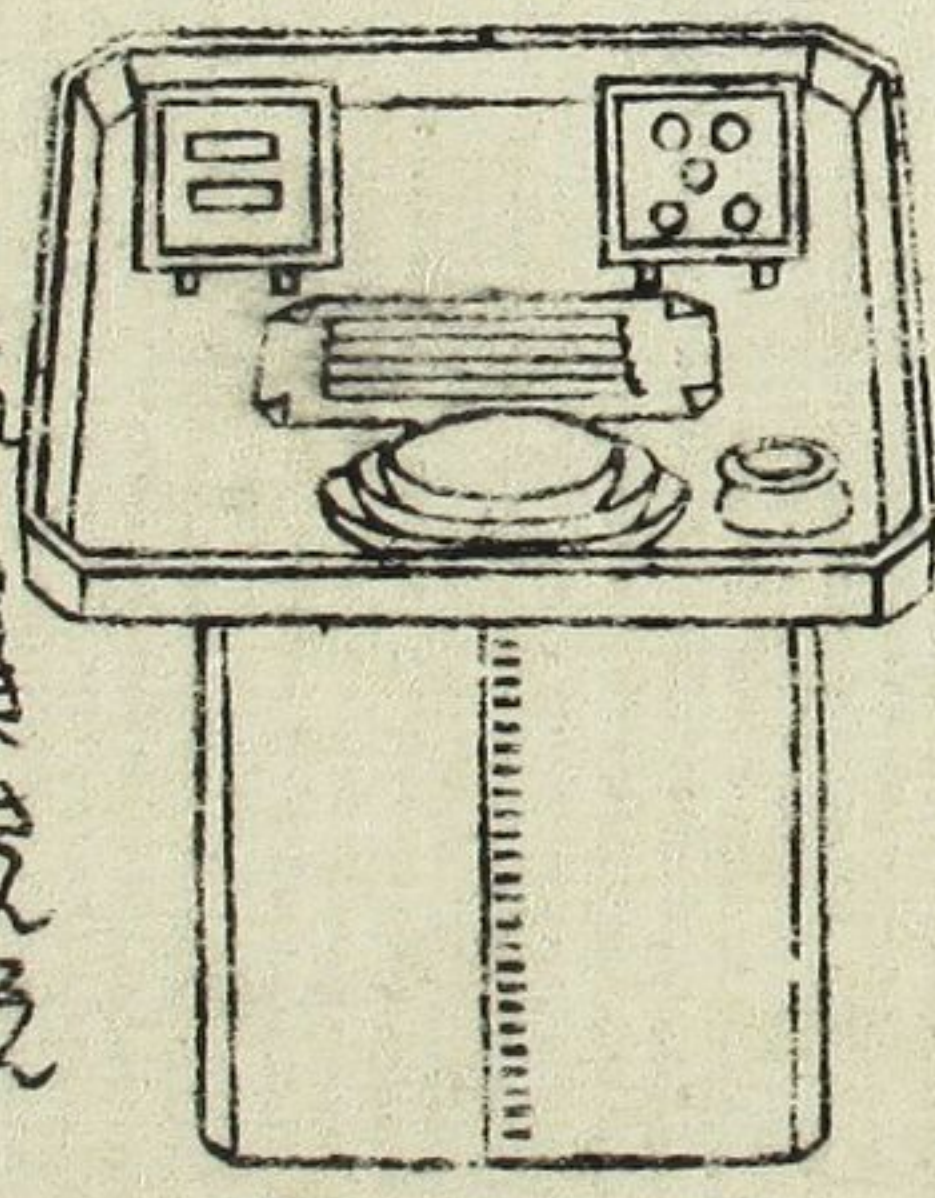
仕来るとより行ふ

方より一子後

船をよのびんづつ

おとりの具を船を

組附びんづつ一の具



○是ハ式三献の

畷

さぶらぎとのふはたおとこよりのことめ女つらきはえ
 夫上まき人下くよのころまで夫婦のふらふら
 む何れどわろくせー祝まらりとも耻しとみあへ
 ろの儀式こころ七五三の儀式をなほとも男ハ
 不我をおとまひ女ハ貞節を失ふものなれば実と
 無益のころの婚姻の大直ハたゞ夫婦中しく睦
 まじくたがひなきをたぐひ貞節をまもるべし
 伏在のころひもとも目出なまらぬこと也



女大志

一夫女子の成長して
 他人の家へ留まり
 是るものなれば男
 子も教あるがや

おんむすめはかとう有様もの
 けしきこそ人のほほも
 老ひをうけて脚き
 ものぞしたとて目
 けしき生れつきたり
 とも立拵ふるまひ
 よりの髪女のひり衣紋
 までも志るやうも

まづは父母家影を
 しく惣よそ月ぬれば
 夫の家よ行く必氣
 陸より夫よ疎まれ又ハ
 田舎の梅平一りれば

おんむすめはかとう有様もの
 けしきこそ人のほほも
 老ひをうけて脚き
 ものぞしたとて目
 けしき生れつきたり
 とも立拵ふるまひ
 よりの髪女のひり衣紋
 までも志るやうも

がく必ひ男方を恨こ
 池中あくなりの終よ
 と進出され恥をさうに
 女子の父母家影を
 直を謂もり男方夫



これハ
 まゝ
 女ハ我々ガんを

よき事と不相應
 なる形がぢを懐む
 べしそまきと妙きと
 ぼんぼんおまへきと
 何の事ぞれく夜
 じ衣ふむかこの
 かざりも月だまらる
 なる事よしく可

のあきとまことふら
 保ちるまことほ女子の
 秋のおしな紀故あり
 正月
 正月
 正月
 正月



あいの
 今よ
 ありて夫よつある
 まいれ
 たる良のまのあま
 恥しうらびあま
 へど物まうして抱山
 あり人中へいづると

一女の容よりも人の務
 せらるるをよとるべし人結
 こそま女ハん強しく
 眼悲しく見出して人
 を怒りま言世ふ何とらふ

いふ日ひも何れに
 打かたてやつたがさ
 して出さそそく
 正古く夫何
 女へ人よ面を思
 られんこの取く
 思ひ彼そ思ふか
 じゆきせしとく

物のいひさづれくいきそ
 人よ先き人を恨
 嘆く家身よ侍人を
 侍笑れ人よ侍が
 ならひ皆女のみちふ

是うづきのちよ
 傾城まもちの
 女の中よ舞子と云
 者何くそ三柱
 せく扇をひき
 さまぐ舞かち

遠るなり女はたが
 唯ひく貞信よ情
 静なるをり



たるハ穢いき老まの
 産業うすぎなればあきは
 とく止やむべきとらざぎ
 ればいんもせんあん方
 ちさるを今いま時ときの
 町家ちやまの娘むすめの夫つまをま
 孫ひなく初はつかきまあん舞まい
 をあはいいこあんはな

一女子ひとハい穢い時ときよりお男こ
 女の別わかを正ただしくして
 假かり初はつもた戯あそすることを
 見まばい志こころむべうらばい一いつ
 のれいはな男おとこ女むすめハい席せきを



よそをひたされらる
 次女つぎよう舞まいなまでめる
 を救たすぐの志こころうら白しろく
 ともいらる

同おなトくせい衣い裳しやうをも
 おなどま又またおう同おなト
 下したもく浴あせい物ものをあ文ぶん
 名なまらばいともいらるあり
 手てハい車くるまよせ衣い裳しやうをあり

ちよと侍とる遠の
 身とのふべしよ
 くお後を弁へ
 志つけんとよ心を
 用也ー
 女のはにまてこの
 の令れりのあま
 汚れざるをわし

と死ハ必獨をせし
 びべー他人ハふ及
 む及夫婦兄弟身ふても
 別を云しくまべし
 とたり今時の民家ハ



むろかりをたん元
 の食としてわまうら
 己ききをそふへし
 けふ今ハ
 このやう
 は振の法をせしめて
 行親をわしめて名を
 祿ー親兄弟身辱を
 あま一一生身をせま
 まる者何りの情をこふ

礼なればとておま
 いとこころへ変り
 てやうしきとさる
 何んぞかたはへ
 〇 狭おれをつくらと
 もい紅と同い心
 齒の白くたげ
 たるはいつとたそ

一婦人の夫の家を我
 家とまらぬはよる
 と嫁をばるといふ我
 家よかるといふ事
 維夫の家を夫姓なり



などのたまりし
 目もろるはさ
 分より下へ

とも夫を怨むべ
 夫より我よりか
 家の夫の家仕合の
 函故ありと名ひ
 嫁してはそを家
 をい

能だ一なるの時
 をまど一がらむ女
 のまゝいそくほほく
 身を指づーたるハ
 ありと夫への不れい
 うしほのいそく
 なきうちよもいそく

ざるを女の乃とよらると
 吉く聖と人の刑たり
 若女の乃よそむきま
 るく時一生の恥いされバ
 婦人よ七去く一いそく



もちひのうらまはる
 有振をつーいそく

女七あり一よ公嫁子
 ざあゆのさるべー二よハ
 子たのさ女いまべー是
 まあを娶へ子孫お疾
 のみたれバ一怒れども

〇上つてハ髪のかと
 ちも風ぞくも今も
 古もかきよま 緋
 下さまハ時々の境
 行まらりてかとの
 かつふ櫛くごの
 作らんかきさの細工
 衣かくの海まよと

婦人の心正しく初美
 うくして娘もたぐはま
 むとも同姓の子を養
 るべし或ハ妻あり子あり
 らば妻あり子ありとも

もまなや千やの糸
 をかむむとせしを
 よまこころう南世
 風ふりと自まの人
 親もく人仲ふ出
 たちらるぞいとまみ
 くるしく恥うし
 まいあこまり

去よおのがらにこゆら
 濁乱なればさるはみら
 悟きふらまればさるは
 四月うづき
 花のこり月
 とこころ月



〇家裏下つてふ者
 多くありともその
 またるんものハ縁
 縫うとつむぎハ勿
 儀殿炊ふとまきの
 そのも毒々ま
 されば家内のおま
 て真じいといひまき

立子 癩病みどの何し
 子 疾何れべき何いふ
 多言みく情なく
 物いひるハ教事とと
 中悪くたりの家れる



時より女子のおや
 けくおはひごまを
 よく教さして女
 の業をまじむハ
 ものなれば去べし
 と物を盗むん何るま
 さはけ七去ハ皆聖人
 の教なり女ハて交嫁
 してそ家を出されて

農家のついでに
 つとの男子ありも
 たいげいせいで
 有て糸をく
 布をおり野
 へ冬の嵐も氷を
 あり夏の暑き日
 あり面をさし

と娘令ふさび
 形る夫よ嫁を
 女のたよ遠ひく大
 る存尊あり
 一女子の家家あり



何のともあり
 べにおりの粧を
 あさんさる落なき
 ありも

と我父母よ中よ
 を行ふ理ありさ
 夫の家ありて
 姉をまが親ふりも
 くと厚くあり

身を清くいさぎよ
 くして去ると夫よ
 れを失ふとざるそ女
 の乃とふへー
 商人のつまもあ
 るい後ぬいの余
 何れも物のついで
 を懐に抱く夫の

孝行をこころまじし親
 の方をまじんで習の
 方を清くはるることなれ
 婿の方の朝夕の見
 まひを願へるは婿の



他をさるる物もつ
 ならざる妻のうけ
 ひきまわす
 引こころを用ひ

方の勤むべき業哉
 怠るべしは妻の
 命つらぶ懐初ひて
 慮るべしは妻の
 姑も同じくおしよ

されがごとく夫をばし
 おきおのれ志りかほ
 子方さし出てまは
 らひたるの悪くほ
 ましきものこた
 我身へ陰りまりて
 換失つゝいゑなき振
 子心を用也し

任まてく一留男姑とく
 子心を増え徹りよも
 怒恨るとなりれ孝を
 身をもつて
 仕ゆれば後ハかゝる

○衣裳字類

おもてうせぬのきり
 袷裡袴袴
 内襟社給
 袖袂裾帯
 紐小袖給

中よのくたなるものや



五月さつき
 たち花月
 何やめ月

單物帷子 ひとものきざびら
 布子浴衣 ぬのこ。ゆき
 表忌下忌 うらこぎ。まつこぎ
 綿律鞆袴 とんちんくまきまは
 行衿手巾 あせらう。てぬい

一婦人ハ別子主君侍 ひとにんべつしゆじん
 夫を主人と名ひ給ひ おとこしゆじんをのたまひたまひ
 懐く事べし つづき
 悔るべし くはるべし
 人の乃ハ人ヲ後より有 ひとののハひとをあとよりあ



行中襦袢 あせぬい。ちゆうちゆう
 短衣股帯 たんえん。ちゆうおび
 肩衣袴 かたきぬ。ちゆうは
 夫は若き者に教さる おとこはわかものにをさる
 ばハ心懸敷く ばハこころかか
 不恥なるべし はぢかざるべし
 不恥なるべし はぢかざるべし
 不恥なるべし はぢかざるべし

羽織頭巾 えをりもづきん
 帽子被衣 たぼうし。かぶき
 衲襪雨衣 ろんざけ。かっぱ
 脚絆腫巾 きやたん。たぶき
 足袋襪襪 たび。おひき

一の勅たり夫の教訓 つとめ おつと けつん
 何れを其作を報へる そのあやせ ちかぐ
 類へきことハ夫と問て重 おつと とよ その
 下知を降ふへへ夫とふ げぢが おつと
 と何れ正しく善くべし ただ ちか



手五芒茶湯のハ茶礼之 てごもやちやうのハ茶れい
 夫若後まいなる時ハ悲 おつとも ときハかな
 れく吹ふべへ怒傳ひて おつとも いか
 手五芒茶湯のハ茶礼之 てごもやちやうのハ茶れい
 夫をひく天と民返に おつとも へん

夜忌蒲団 よぎのふとん

蚊帳襪 わや。たぶき

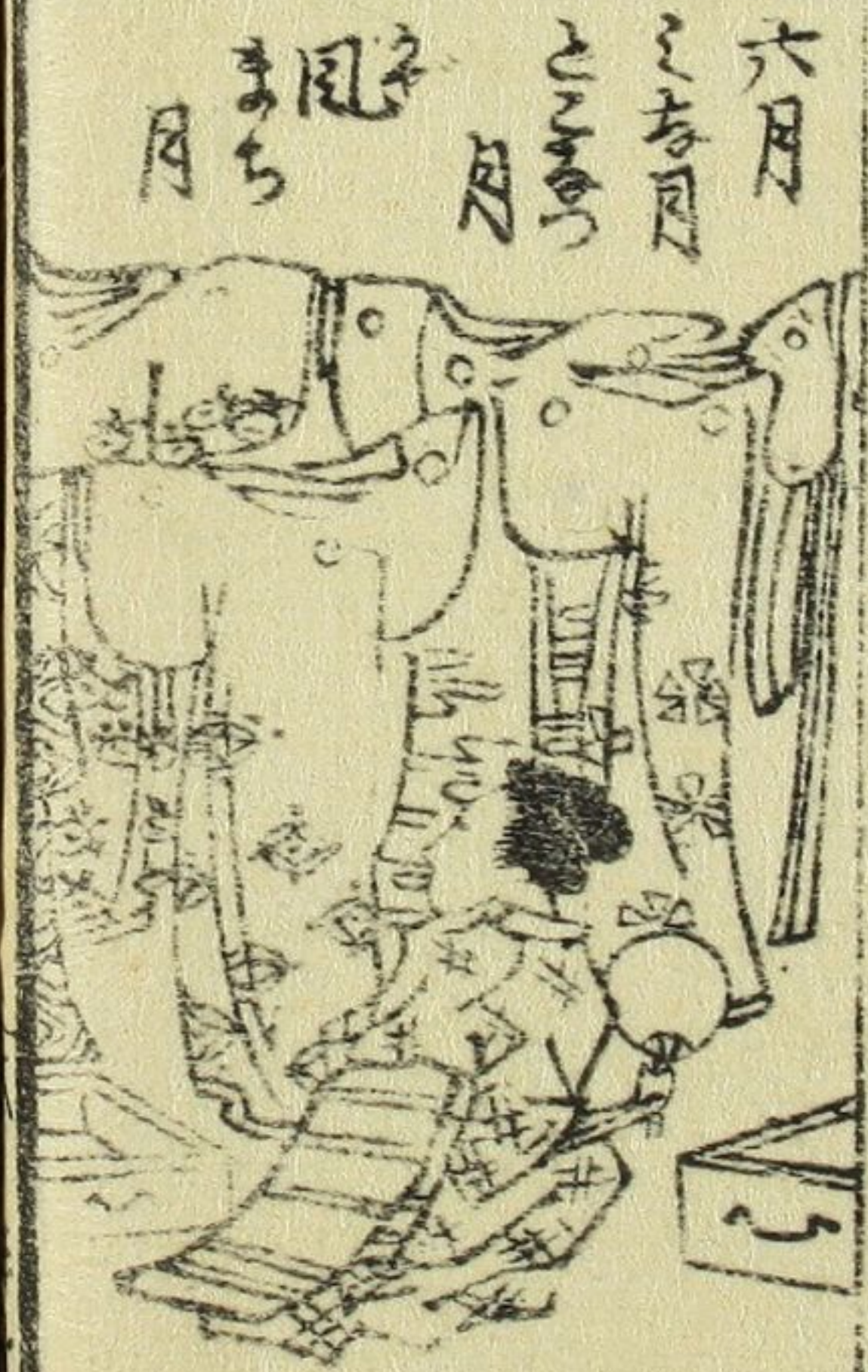
蕨膝 まへざね

○袴布字通 はくふじどお

金襴緞子 きんらんどんち

くも夫は逆ひて天 くもおつとさかひててん

の野を文へら ののをぶんへら



一見公女公ハ夫の兄牙 いちけんこうむこうハおつとけうご

なれば致ふべし夫の靴 なればいたさふべしおつとくつ

数子侍は侍まるま かずこざむらいはざむらいまるま

胃が娘のんくま戻る家 いのがむすめこのんくまもどるいへ

身のおもも空うらば みのおももあそらうらば

紗綾縮緬 さあや。ちりめん

編子結紋 りんま。りゆうもん

光綾子袖 ぬめりんまのうで

光緒緒紅 こうしよしよべに

綿程く細 ゆき。たじろぐひ

羅紗毛纒らしゃもうせん
 繡羅笈板ういものうせいのこ
 褙子とろのん 縞袴しやちん
 縞子しや 縞袴かひん
 紋羅練結もんらんねりぎね

づくまれば嫁よめの心こころ
 も協あはれふ又また嫁よめを欺あざむく
 穆むつづくまて一ひと陣じん又また夫おとこ
 の見み搜たづねる厚あつ子こ致いたさる
 家いへ日ひ比ひ嫁よめと同おなくまへし



縞印華布しやのんのかはふ

一ひと嫉ねたみ妬ねたみの心こころめく
 べうべうに男おとこ婿むすめ礼れい方かたの
 侍さむらいむべ一ひと怒いかでか怒いかでかへ
 嫉ねたみ妬ねたみの心こころめく
 音ね禁がらみも恐おそく冷ひやく



怒を先替へく
 止後、夫の心静か
 時後、練むへ、必争多を
 暴く、声をつらげて夫
 子、逆ひ叛くとなりれ

緇西洋布
 綉物多結
 綾唐真結
 柳條生結
 緞織瀑布

却く夫、陳まれ見
 限らるる物なり、若夫
 不義に、わ我を
 和げ、声をつらげて
 練むへ、練を吹かす

生平上布

縹那内綬

地白纒染

絞藍小紋

木綿紅摺

七月を母

あし月

あし月



一云借を懐く多くを

べうは彼も人を説

麻子黒染

絹衣憲法

中形模様

花色天色

紺書持金

物をりあへうは人の徳を

世を何は女子供て人

よ傳へ語へうは徳を云

傳あるよの教訓とも同

悪くならり家内治るに

清黄煎茶 あきぎのりくぎ
 白茶媚茶 あひびら
 藍油紺色 あざい
 納戸煉竹 なうり
 菴き生茶 あまき

一廿八番に心遣してそ
 身を堅く侍り候る
 べし朝早くおき夜
 ら早く寝よとい候
 ぞとく家内の事よん



栗柿 くりかき
 水色 みづいろ

を用ひ織縫績績お
 あり酒分は又茶酒と
 多く春づくは茶
 女小舟浄海りあどの瀧
 する事を足んばへし

栗皮洗滌

濃煎茶

濃紅茶苗

桔梗梅糖

烏羽松葉

冥寺などよそく人の

多く集る所へ早業よ

茶内へ余り行く

八月 壬子月
九月 癸卯月
十月 甲辰月



緑茶批色

薄花椿柳

朽葉紙摺

蕨枳殻印

松柳子滌

一壺觀をよそく迷ひて

神佛を汚し逆射撥

よ祈るべくは只人なるの

勅をよそくする時へ禱

とくも神仏へ身する人

乱彩摺込

平金正平

深分曙霞

東袷墨絵

彩乞上画

登

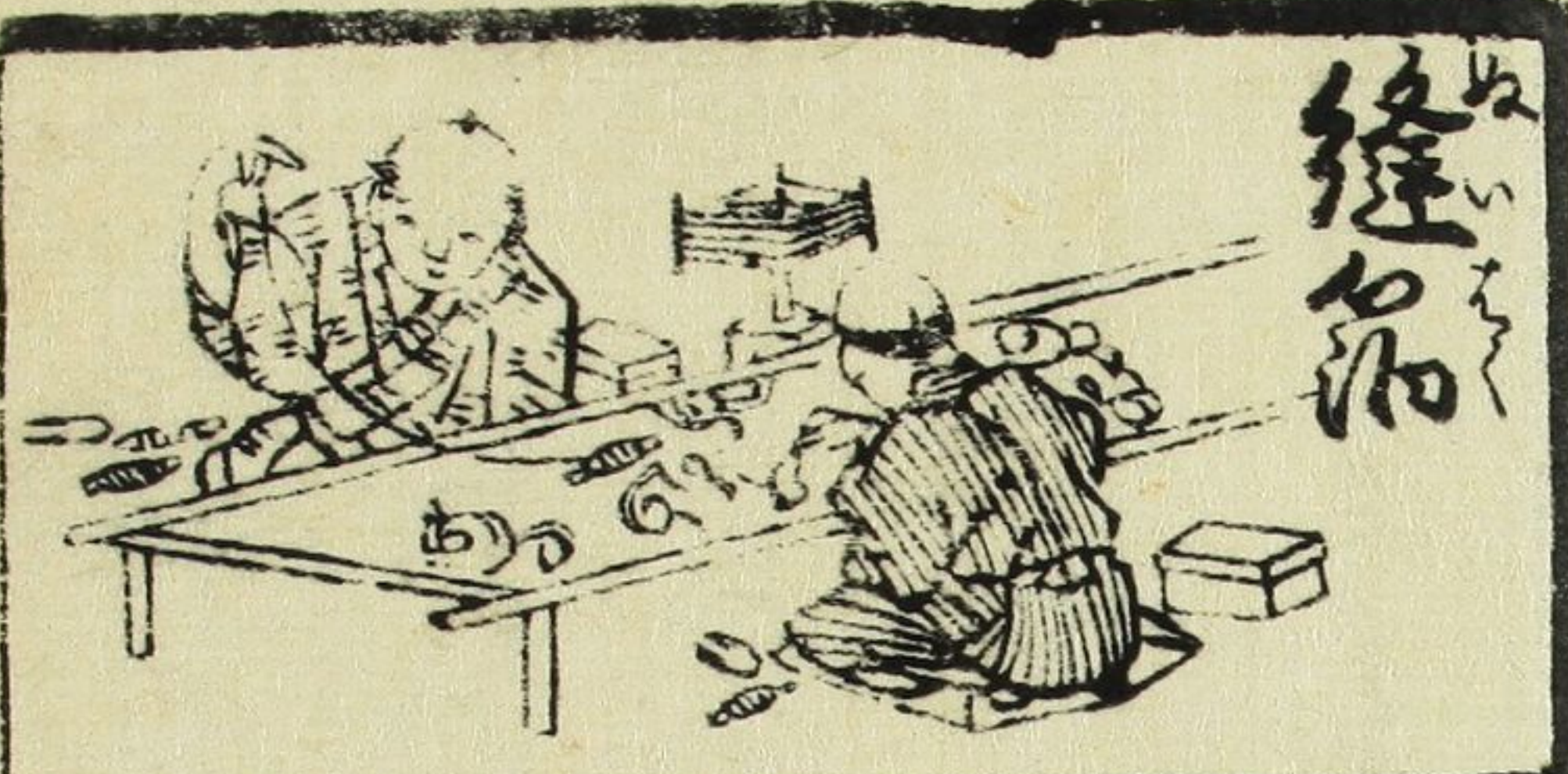
一人の妻と成てふを家

をもく保へし妻の初

ひ悪く放擲されを家

を破る糸を更換はして

縫糸



費人を修へては衣服飲

食なども身の有限は

ぐひ用ひく奉有るあ

形

一表支財ハ夫の親類友

厚紙薄紙
右細強弱
縷温絮線
縷線胡糸
金線縷糸

連下袴等の着る男小
を打解く物伊豆付
べうべう男女の隔を固く
きく一如何なる用あり
とを若く用男は文と通

裁 縫 績 紡 織
縷布を
糸を
糸を
糸を
縷を



三月魚り次

九月
十月
十一月

替蝮ハ黃帝の
 后きんぎょのれじのひ
 初めはつめなほしとをか押
 冬至のとせのひよりち蚕
 のたまをとりのひ
 何なんともならのて生
 ぶるを枯くたる
 たとしらへ葉を

一身いっしんのたもたる葉のそめ
 之これ採と採となごも月ままぬ
 根ねまましし身みと衣服ふくの
 様ようまましし御おん糸いとけかり々
 緒いとく清をとりし

きぎのこのこのこ
 糸いと線せんとあらり
 よよくく天てん蚕さんの婦の
 幸さいききをとります
 糸いと七しち請せいまつつる
 糸いと七しち請せいまつつる

人のひと月つきままああどどああるるのあらり
 唯ただ月つきがが身みままああらりなる
 をを用もちゆゆべべ

十月じゅうがつままああらり月
 糸いと七しち請せいまつつる月
 糸いと七しち請せいまつつる月



昨日到城廓
 遍身綺羅者
 不是養蠶人
 至^て^て^て^て^て^て^て

一糸郷の親の方よ私し
 夫の方の親類を次よ
 是^は正月節^の事^はな^らむと
 夫^は先^づ夫^の方^を勸^て次
 よ我^をや^の方^を勸^へし



うなる衣板をま
 うひ掛織もるおの
 つれをさ^ま

夫の許^はざる^は何^の方^も仍
 へ^は私^はよ人^はも終^もの
 一^は女^は我^の親^の家^を継^ぐ
 ば男^の妹^の行^を継^ぐよ

実よ何れいんさ
 なしこのかま
 ○横をるとも同じ
 とさありぞ始れる
 とぞ本朝の神代
 よも横のまはりて
 いと久し
 ○布のふりし者

王が教よりのも時を大切
 子必ひ孝行をなへし
 嫁し〜後の我教の家
 子行とも希るる〜増
 丁他の家へハ大形の役を

三州のまはりて
 夢をえそめて織
 ぼけくのも度ゆ
 あく煮く白て
 つき洗淨てさけ
 あり南教をた一
 とほる由あら晒
 とらふさふさめを

十月
 廿二日
 廿三日
 廿四日
 志も
 後かた教へ〜
 教置のよれおと我傳て
 きて〜て身同をぬ〜又裁
 不め



生ま平ひらとふと休やす
 用もちのもちもも木きとと云い
 たりた布ぬのののららるる取と
 多たしし加かたたええのの出で
 といい講こうととふふ是これハ
 いいかかしし法ほう花はな八はち講こうの
 布ぬの終すまこのこの布ぬのをお
 むもちくく用もちひひししゆゆま

一あ下も初は解あきまめめききをを産う
 一い方はのの言こと又また自じらら辛しん苦くなな
 悪くくく勤つとむむとと女をんなのの化か法ほう
 たりたりり留とどめめののおおよよ衣ころもをを
 縫ぬい合あひひをを調あららわわすす夫おとこはは仕つかへ



其その名なとと氏うぢ迫せまりり冊ふ
 彼かよよららももいいつつる

衣きぬををままききしし席まをを掃はきき
 をを之これ日ひ々々汚よごれれをを洗あらひひ事こと
 はは家いえのの内うちにに形かたち々々猥しづ小こ
 介そとへへ出いづづべべき
 一い下げ女ぢまををつつふふよよんんをを用もち也なり

○物のつりハ神代
 より有る針女を
 中四神女体しく
 衣服を身纏ふ
 とのり又聖徳を
 子の婦を為料と
 しく針所を指
 せむとらり

考なり悲べし又卑き老
 を使ふハ孝子合さ侍
 古まよりそれを怒罵て
 止ざれば約く妻を返すと
 多くしく家内志づら



○物の女のまき扱
 何中みも扱まらう
 き矢脊大系を
 馬のさと人
 あらば悪き古又何くバ
 ねく云教く保を悪
 まべし女のさハ悪く怒
 るべし心の内あら何
 まれしくおまハ新親

山やま入いく木きをま伐きり
 土つちのつら穴あなをほりきり
 たる木きをあらうと
 生なま草くさをたきてく
 毛けがはらはゆへよ
 黒くろ木きのこのたり
 此この木きをつらひて村
 のお女んながらんこのま

をま固か削けく急ぬ極よ
 つつふふととへへ急めむ急む急べき
 夏なつ何なにととババ材ざいをま惜しむ惜む惜べき
 但ただ一ひと玉たまがままま子こ入いらんか
 ととくく用もちふもええぬぬ者ものよ

牛うし馬まをおかせて村
 のや町まちにおきてらる
 これをや失せたたるの悪わる
 木ぎととりその
 辛しん苦くうまれつき
 たたればさのと苦
 ととももあいぬけき
 子このあもるるり



恨うらみよよららへへくくべ

又此の末にきこる
 何とのぬきもりの様
 おもをえて病有
 人これ入るはか
 よう何事なれり
 づけく美譽のか
 ますやうと云り
 心地よりきこ

一凡婦人の心根の悪
 痛ハ和らぎ
 怒恨ると人を待ると
 物奴と智恵の海
 なりけんの病八十人



又白川の山中
 白き石をみる
 里人農作の暇
 七八を必りり
 男及女が
 顧戒く改去
 智恵の海
 疾を及る女
 陰性人

石工をば用使ひ
 これを研とうこら
 つる夫を里の女
 馬おせくお指
 せく夢人か道
 き里てもか女
 ありひ何をわ
 妻きふらうら

陰ハ夜中く晴し
 女ハ男子比るよ
 目のおなる怒る
 をも知れ又人の
 へことをも弁人
 杖夫



き海ノの辛者
 多うめれ
 茶いば辰を名物
 目グ子の愛と成
 をも知れ科も
 を怒り怒役地
 人を妬とみそ
 独たんと名ど
 人よ惚れ

ともやうしほやくも
 ちまひ出せの是
 をつむよりこり
 由るまでたご女
 の幸者として
 くらゐぬまき
 たり
 〇海辺の黒くハ

疎まねくは我が仇
 となることを知れば哀葉
 なく清椿し子を育
 せしも是も溺れく習
 せぬ一羽魚なる



塩やくこころの
 とぬあられ先湖
 板子何れも家身を潔
 く夫はほほへし古の法
 子か子をまき三日床
 下は附しむるとり是
 も男ハ夫ハ娘ハ地ハ

汲く神さままきか
 かしてそのすまを
 ほうめく塩がまを
 のよものしんま
 神よりまきかまを
 らとるここれ
 たまのしんま
 たるふぐりをたぬ

家なるゆよ美の良よ
 付も夫を先え我身
 を後よ一秋を甘るゆよ
 能る阿りよをも傳るん
 たのく又要いこと阿りよ



塩の肉は入て土
 かまたとゆつて焼
 あり

人よ云々 運も傳るん
 早くこを及め
 童く人よ習はるる
 身身を信く又人よ悔
 しくも腹を懐く

身を汲つて
 火たぐふと
 吉ふ
 何のあつた
 極やまふ
 けげのおぐ
 きんてきふりう

能く物を取れ
 一のく
 夫婦の仲自れ
 行は急長く連
 く家の内おぐやうなる



と備へた
 右に備へた
 ありやう
 解け折れ
 ろまはたりしめよ今

海辺の女うみべのむすめも
 を延のび虫むしかたの入りこ
 しと繩なはをうけて水
 に入いりてあまのこ
 ののちをとり
 まてとよくとまら
 とき舟ふねより引上
 るなりはくせれ

代よの人ひと女子むすめは衣服いふく乃
 多おほく多おほく与よ言ことく婚よめ
 姻いりせしむるものもい
 くを能よくおしむると生う
 身を保たもつ家いへあるじ



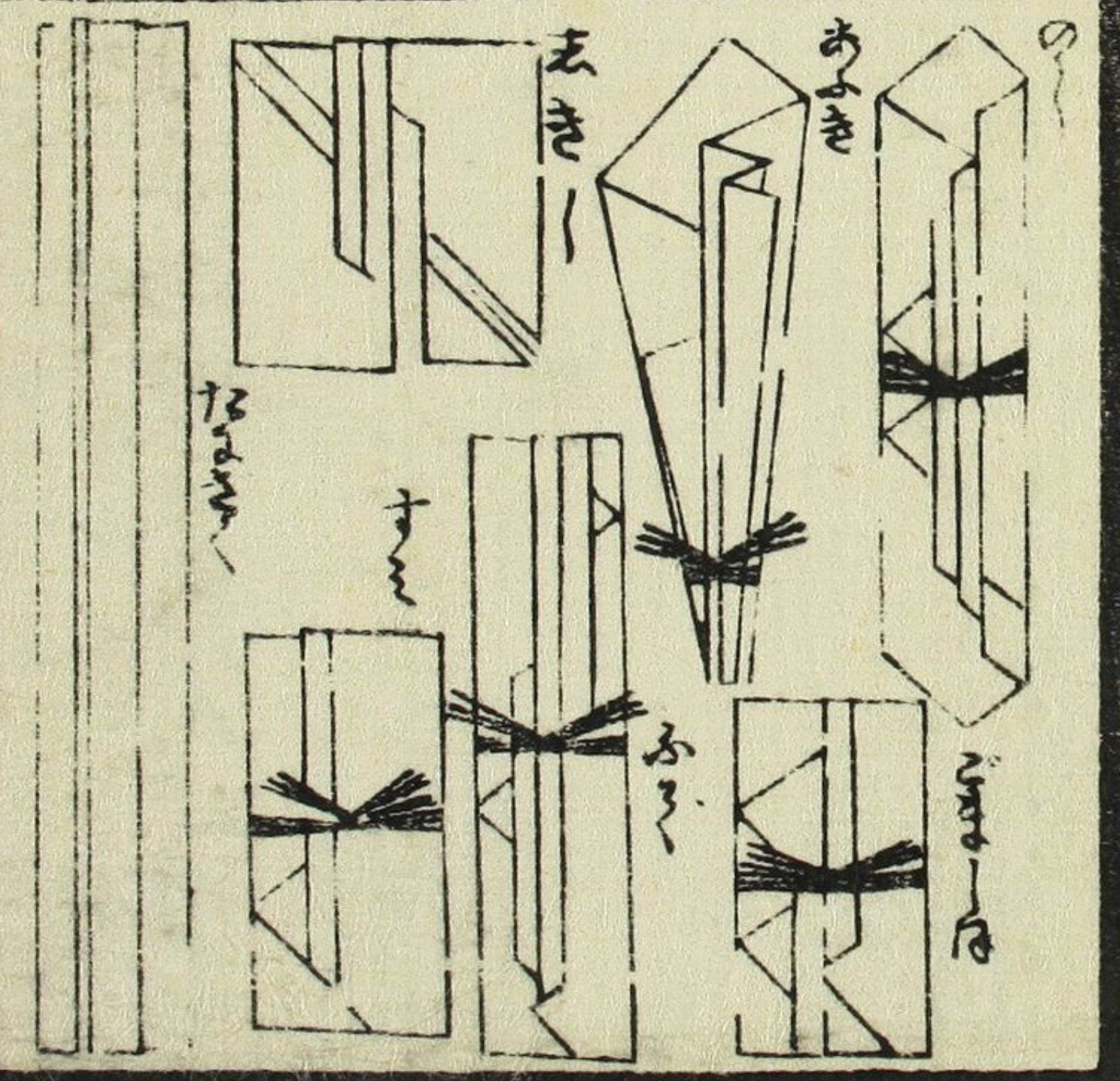
倍よ人ひとのく百ひゃく言ことを
 しと女子むすめを嫁よめせしむ
 ることを知しく十じゅう万まん銭せんを
 出いしと子こを測おしることを
 知しくと身みを保たもつ

苦をきくははら
 まはらておごり
 ト女のたかまを

女子の救うる人は理を
 知るびんば有べうらば

益お貝原せんせは述

けふとまはらうらば
 よく情むが
 衣服をたつ附の
 朝姫の
 おくちかめがら
 長とめあま
 上のつひそめ



朝あさ日ひきたあひの
 家いへのおしと男おとこの
 うらまゝ今いまぞなるる
 〇おとままあをたつ
 とままとままのま
 かなかなのうたえひ
 のままなれは時ときをも
 をももたさりりり



天保十四

摄都 晓鐘成撰並畫圖

天保十四癸卯九月吉辰

浪花 平聖町筋淀屋橋西人 石川屋和助

書林

御免 坂筋大宝寺町北八人
 本屋治助板

114

